



しん や えい こ  
新屋 英子さん

(俳優・劇団野火の会)



## たくましく生きる ハルモニを演じて35年

### 在日一世の女性の半生に衝撃を受ける

2073回。これは、新屋英子さんが一人芝居「身世打鈴」を演じた回数である(2007年11月現在)。1973年4月29日の初演は、喫茶店につくられた小さな舞台だった。以来、学校の講堂や市民ホール、結婚式の会場から旧大阪ドームまで、求められれば衣装や小道具を詰めたバッグを提げてどこへでも出向き、演じてきた。

「身世打鈴」は、厳しい差別のなかを生き抜いてきた在日一世のハルモニ(おばあさん)、申英淑が語る身の上話である。在日朝鮮人女性の半生の聞き書きをまとめた本がきっかけで生まれた創作劇だ。本を読み、「こんな人生があるのか」と「体に稲妻が走るような」衝撃を受けた新屋さんは、著者の了解を得て、自ら台本を書いた。

「日本と朝鮮の歴史もほとんど知らなかったから、一から勉強しました。そして、日本がどれだけひどいことをしてきたかを知っていったんです」

### 軍国少女から一転、芝居の道へ

同時に脳裏に蘇る記憶があった。小学校時代、同じクラスに朝鮮人の女の子が2人いた。ひときわ貧しい身なりで、教師までもが差別的に接していた。新屋さんはかばったこともあったが、「かばうことで、みんなからよく思われたいという気持ちがあったんです。かわいそうな子と見下してもいたと思います」とかつての自分を振り返る。「人間、優越意識が一番いけない。自分は人より優れているという意識が差別を生み出すんです」

本気で神風を信じる軍国少女でもあった。16歳で陸軍師団司令部の試験を受け、下士官待遇で女

子軍属となった。「“女ながらも軍隊で働いている”と、ここでも優越意識で鼻高々でした」

しかし敗戦直後、威張っていた将校たちが我先にと物資を持ち逃げする姿を見て、権力者の浅ましさに心底、幻滅した。民主主義や女性運動に触れ、生来の正義感が沸き立った。新劇運動が活発になり、演劇好きだった新屋さんは仕事を辞めて芝居の道を志すことを決意する。その頃、芝居や文学への情熱を語り合える鶉野昭彦さんと結婚。ふたりの子どもを育てながら女優として活躍した。そして45歳の時に「身世打鈴」が生まれたのである。

### 差別を笑い飛ばし、 たくましく生きる姿を伝えたい

日本人の自分が演じることに不安はあった。だから「なんや、日本人がやると聞いたけど、朝鮮人やないか」と在日の男性客がもらした言葉を聞いた時は、



「やった!」と心の中で叫んだ。多くのハルモニと出会い、親交を深めてきた。今は迷いも不安もない。1回1回の舞台で申英淑として生き、「トンイルマンサー!(統一万歳)」と叫ぶ。また、鶉野さんとともにマイノリティに視点を置いた数々の芝居を創作している。

「でも、差別の悲惨さを涙で伝えるような芝居はしたくないんです。私が出会った人たちは、ひどい差別を受けながらもたくましく、時には笑い飛ばしながら生きてきはった。そんな姿を伝えたい。そこから観た人なりに何かを感じ取ってもらえたらと思います」。新屋さんはそう言葉を結んだ。